

グレンアイラ市に住む高齢女性の暮らしとライフヒストリー(その6)

野邊 政雄

メルボルンのグレン・アイラ市に住む3人の高齢女性に、①日常生活、②ライフヒストリー、③何に幸福感を感じるかの3点に関して聞き取り調査を2006年9月におこなった。本稿では3人の語りを提示し、それに考察を加えた。

Keywords: 高齢女性, メルボルン, パーソナル・ネットワーク, 主観的幸福感, ライフヒストリー

(2) バーナディットさん

バーナディットさんは1934年生まれのカトリック教徒で、夫は1935年生まれのプロテスタントである。彼女はビクトリア州の地方出身である。メルボルンに働きに来て、北アイルランド出身の現在の夫と結婚した。1人の息子と2人の娘が夫婦の間に生まれた。彼女は結婚して専業主婦となったが、子供たちが小学校にあがった後に再び働いた。彼女は自動車が好きで、就いた仕事の多くは自動車関係である。現在、バーナディットさんと夫はともに退職して、無職である。夫婦で一軒家に住んでいる。子供夫婦と頻繁に交流している。

バーナディットさんは自らの健康状態を2と評価していたから、健康状態は比較的よいといえる。また、ロートンの活動能力指標によれば、彼女は11の項目すべてを「問題なくできる」と答えていたから、活動能力はとても高いと判定できる。レスリーさんのパーソナル・ネットワークは、夫、1人の息子、1人の娘、息子の婚約者、本人の姉の夫、1人の近隣者、3人の友人、1人の医者、1人の牧師から構成されている。息子、1人の娘、息子の妻、本人の姉の夫といった親族はすべて「メルボルン」に住んでいる。近隣者は「近隣地域」にいる。1人の友人は「サバーク」に、2人の友人は「メルボルン」に住んでいる。医者と牧師は「サバーク」にいる。ロートンのPGCモラールスケールの得点は11点と、幸福感はそれほど高くない。

バーナディットさんの年譜は、表2のようである。

表2 バーナディットさんの年譜

年	(年齢)	出来事
1934年	(0歳)	コーラックで出生
1945年	(11歳)	一家で、スタンホープに移る
1950年	(16歳)	一家で、カランバラに移る
1955年	(21歳)	交通事故で腕を負傷する
1958年	(24歳)	メルボルンで働き始める
1961年	(27歳)	結婚
1962年	(28歳)	現在の家に移り住む
1963年	(29歳)	長女が生まれる
1964年	(30歳)	次女が生まれる
1966年	(32歳)	息子が生まれる
1971年	(37歳)	働き始める
1986年	(52歳)頃	退職する
1987年	(53歳)	父親が死亡
1991年	(57歳)	母親が死亡。息子が家を出て、夫婦のみとなる。夫は駐車場のマネージャーの仕事をやめる。夫婦と孫でアイルランド旅行をする。
2003年	(69歳)	夫が退職する

①日常生活

私は月曜日には6時半に起きます。そして、朝食を食べて、シャワーを浴びます。そのあと、痛み専門の診療所に行き、坐骨神経痛を和らげるため、背中にレーザー光線を当ててもらいます。月曜日から金曜日までの毎日、その治療を受けています。もしも必要であれば、土曜日にも治療を受けます。レーザー光線を当てる治療は10分か15分で終わります。痛みが2年半ほどありますが、治療を受けると痛みがなくなります。すばらしいことです。家に帰ってから、洗濯をします。それを終えてから、パソコン

でサウジアラビアにいる娘が私たちにEメールを送ってきているかどうかを調べます。夫のペイドンは既に退職しています。夫と私は、自宅の庭の手入れを火曜日、水曜日、木曜日などにします。夫は友人の家でベランダ（patio）をつくるのをときどき手伝っています。そのときは、私は昼食を作って持って行ってあげ、夫と一緒に食べます。家に戻ってから、家の掃除を少しして、夕食を作ります。そうすると、夕食の時間になってしまいます。夕食の前に、夫と私は裏庭のベランダで少しお酒を飲みます。夏はとても気持ちがいいですが、寒いときでもそうです。1日の仕事のあとで、お酒を飲んでくつろぎます。夕食を食べて、食器を洗ってから、居間でテレビを見ます。これが私の月曜日から金曜日までの過ごし方です。木曜日、ときどき火曜日に、私は夫と一緒に映画へ行きます。夜でなくて、昼間に行きます。

夫は毎週木曜日にサウス・オークリー・クラブ（South Oakleigh Club、ローン・ボーリングのクラブ）で庭の手入れをしています。ローン・ボーリング用の芝生の草を刈ったり、庭の手入れをしたり、壊れたものを修理したりしています。さらに、夫はその日に4人のおばあさんの家に行き、庭の手入れをしてあげます。ボランティアでこの仕事をしてあげています。私は昼食のお弁当を持って行ってあげ、夫と一緒に裏庭で食べたり、家の中でおばあさんと一緒に食べたりします。夕方は家にいます。

週末、私たちは孫に会いに克蘭バーン・ノース（Cranbourne North、メルボルンの中心から南東に44キロのところにあるサバーブ）にある長女の家に行きます。しばしば翌日に家へ帰ってきます。週末、ドライブに行くこともあります。1ヶ月に1度ほど週末に、カランバラ（Korumburra、メルボルンの中心から南東に120キロのところにある町。人口約4400人）にある友人の家に行きます。カランバラはフィリップ島（Phillip Island、メルボルンの中心から南南東に140キロのところにある島。ペンギンが有名で、多くの観光客が訪れる）に行く途中にあります。素晴らしいところです。友人はそこに農場を持っています。私はそこで子供時代をすごしました。夫はフットボール（オーストラリアン・ルールズ・フットボール）の試合をテレビで見ますから、私たちは土曜日の夜に家にいることもあります。応援するチームの試合があると、私もテレビでフットボールの試合を見ます。私はジーロング・フットボール・クラブ（Geelong Football Club）を応援していますが、そのチームの成績はよくありません。

長女は夫と2人の子供とともに克蘭バーン・ノースに住んでいます。次女はサウジアラビアにいます。次女の夫はブリティッシュ・エアロ・スペース社に勤めていて、仕事の関係でサウジアラビアに8年間住んでいます。娘とその3人の子供たちはサウジアラビアに6年間住んでいます。次女夫婦は克蘭バーン・ノースに家をまだ持っています。息子と婚約者はチェルテンハム（Cheltenham、メルボルンの中心から南東に20キロのところにあるサバーブ）に住んでいます。婚約者には他の男性との間にできた娘がいます。これが、私の家族です。

先週の土曜日、私たちはチェルテンハムの息子と婚約者のところに行きました。息子の婚約者から、電気コンロの輪状加熱部分を壊してしまったと電話があったので、夫が行って修理してあげたのです。ちょっと困ったことがあると、子供たちから「お父さん、助けてよ」とか、「お父さん、これしてくれない」とよく電話がかかってきます。

サウジアラビアにいる娘夫婦はこの7月から8月にかけて休暇を取りますが、オーストラリアに帰って来ないで、トルコへ1ヶ月間旅行に行きます。娘夫婦は来年3月にオーストラリアに帰ってくる予定です。

私たち家族はあまり旅行をしません。子供たちはとくにそうです。サウジアラビアでは気温はある日47度になったこともありますし、湿度は97パーセントにもなりますから、私は娘のいるサウジアラビアにも行ったことがありません。25度ならいいですが、私には27度は暑すぎます。メルボルンの気温が27度になるとしても、私たちはここにいるのがいいです。

私はボランティアの仕事をしに、老人ホームのビラ・オニール（Villa O'Neil）に行きます。以前は1週間に1回行っていましたが、現在は、1ヶ月に2回です。老人ホームで、老人が工作をするのを手伝っています。私の母親が死んだとき、その老人ホームに入っていました。40人の老人が入居していますが、だいたいその半分が工作に参加します。そして、テーブルなどを作ります。母親がそこに入居していた頃からボランティアの仕事をしていましたから、かれこれ20年ほどやっています。最初の孫が生まれたとき、孫をそこに連れて行きました。

私はかつてネイバーフッド・ウォッチの事務局長（secretary）をしていました。孫の男の子が生まれたとき、その子は重い病気にかかっていた。私は頻繁に病院へ行かないといけませんでしたから、ネイバーフッド・ウォッチの仕事にだんだんと係わらなくなりました。ネイバーフッド・ウォッチはいいことだと思います。でも、どの人がどういったこ

とをすることになったこと明確になっていませんから、この辺のネイバーフッド・ウォッチの活動はだんだん盛んでなくなりました。

②ライフ・ヒストリー

父親はコーラック（Colac, メルボルンから南西に150キロにあるビクトリア州の町。人口約10000人）に住んでいました。私の母親はイングランドから来て、コーラックで仕事に就きました。両親はそこで出会い、結婚後もそこに住んでいました。正確に言えば、私たち家族はコーロルーク（Cororooke）に住んでいました。コーロルークはコーラックから10マイルほどのところにあります。両親には7人の子供がいました。年上の2人は女の子で、年下の5人は男の子です。私は2番目の子供でした。私はコーラックで大きくなり、その小学校に行きました。

私の父親はチーズ作りの職人で、オーストラリアで最も高い資格を持っていました。彼は工場に行くと、チーズができるのを見て、凝乳（curd）を味見するのが好きでした。私たちはチーズ工場の社宅の1つに住んでいました。私は今でもチーズをよく食べます。どのチーズを買ったらよいのかがすぐ分かります。私は粉のように砕いたチーズ（crumble cheese）が好きです。それは最高です。

ある日、大火事がありました。チーズ工場が所有する家のうしろに、大きな木材置き場がありました。スワグマン（棒にバッグをつけて渡り歩く労働者）がそこに住んでいました。木材の間は暖かいのです。スワグマンの1人が火をたいたところ、木材置き場すべてが火事となり、かなり多くの家が燃えてしまいました。私たちの家はだいじょうぶでした。両親はすべての子供たちを農場である祖母の家に行かせました。私たちは鉄道の線路を歩いて、祖母の家に行きました。火が消えるまで、私たちは祖母の家にいました。祖母の家にいたのは一晩だけでした。弟が「お父さん、お母さんを守ってあげてね」と言っていたのを覚えています。幼いとき、この火事はトラウマとなっていました。

11歳か12歳の頃、父親がスタンホープ（Stanhope, メルボルンから約228キロ北にあるビクトリア州の田舎町。人口は約500人）のバター工場に就いたので、私たち家族はスタンホープに移りました。スタンホープへはメルボルンから5時間くらいかかります。私たちの家は鉄道の駅の真向かいの角にありました。私たちはこの家しか借りることができませんでした。その家がかつて古い寄宿舎（boarding house）で、ワイン貯蔵庫などすべ

ての部屋は地下にありました。イタリア人の戦争捕虜がスタンホープのどこかに収容されていました。そこから、1人が脱走しました。軍隊が脱走した捕虜を捜しに私たちの家にも来ました。私たちは4年間スタンホープにいました。私は、ラッシュワース（Rushworth, スタンホープより10キロほど南にある田舎町。人口約100人。）の学校へスクールバスで行きました。

そのあと、カランバラに移りました。私が16歳か17歳の頃です。メルボルンからそこへ行くのに5時間くらいかかります。弟たちはそこで小学校へ行きました。私は16歳で学校を出て、カランバラで事務の仕事に就きました。コールズ（Coles, 大型スーパーマーケットのチェーンストア）のオフィスに数年勤めました。そのあと、ガソリンスタンドの事務所で働きました。ガソリンスタンドを所有していた人が私に車の運転を教えてくださいました。その人に助手席へ座ってもらい、私はカランバラのまわり、横道、裏通りを運転しながら、運転の仕方を習いました。18歳のときに運転免許証を取りました。私はそれからずっと車を運転しています。

ガソリンスタンドで働いていたとき、私は卸売店で自動車のパーツを買うために、メルボルンへ車で行きました。友人とその娘が連れとして車に乗っていました。私は手を車の窓から出して運転していました。トラックが私の車にぶつかって、私の車が横転しました。私の腕は車の下敷きになり、腕を負傷しました。トララディン（Tooradin, メルボルンから南東へ約65キロにあるビクトリア州の田舎町。人口約650人。）でこの事故は起こりました。トラックの運転手は立ち去ってしまいましたが、別の男性が来て救急車と警察を呼んでくれました。この事故のために、私は3年間働けませんでした。私は21歳の誕生日を病院で迎えましたから、21歳のときです。（オーストラリアでは21歳の誕生日を盛大に祝うから、バーナデイトさんはその誕生日のことを覚えていたのである。）

母親に助けてもらいながら、私はカランバラにとどまっていました。私は腕にギブスをしていましたから、あまり多くのことはできませんでした。家と病院を往復していました。まず、鋼鉄を腕に入れましたが、だめでした。次に、私の足の骨を取って腕に入れましたが、これもだめでした。そこで、別の人の骨を私の腕に入れたところ、うまくゆきました。治るまで3年かかりました。何回も手術を受けましたから、整形外科手術はもうたくさんです。交通事故にあって、腕を完全に伸ばすことができなくなりました。腕は今でも少し曲がっていますが、普段の

生活ではまったく問題はありません。ただし、私はケガのためにかつて好きだったテニスができなくなりました。

交通事故で腕を負傷したとき、私は一般開業医や専門医に「私は車の運転ができますか」と尋ねました。彼らが言ったことの1つは、「車の運転をやめたら、自信を失って絶対に運転しなくなるよ」というものでした。そこで、私は車の運転をしました。ケガで片腕がきかなかったので、私はどのように運転したらよいか分かりませんでした。カランバラの警察官は免許証を申請する誰にでも、「片腕で車を運転するベティ・シーディ（Betty Sheedy, パーナディットさんのこと）くらい運転できれば、免許証を取れるよ」とよく言っていました。

腕のケガが治って病院に行かなくてよくなってから、私は再び働き始めました。私はメルボルンに来て、母親の友人の家に住み、都心のパーク・ストリート（Bourke Street）の真向かいにある駐車場で働きました。そこでも事務の仕事をしました。私はここで夫のベイドンと出会いました。ベイドンはそこでマネージャーをしていました。私たちは27歳のとき結婚しました。3人の子供ができました。はじめ子供のトレイシー（娘）と次の子供のデビー（娘）は13ヶ月の違いで、デビーと末の子供のブレンドン（息子）は15ヶ月の違いです。子供たちはとても年齢が近いです。

トレイシーが赤ちゃんだったとき、私たちはグレンハントリー（Glen Huntly, グレンアイラ市を構成するサバークのうちの1つ）に住んでいました。そして、グレンハントリーからこの家へ引っ越してきました。当時、隣の家から向こうのところはメリオット（Mariot）という名前の農場でした。その農場主はだんだんと農地を売ってゆき、住宅がこのあたりに建てゆきました。はじめこの家を借りていました。家主が家を売ることにしたので、私は引っ越しのために荷造りをしました。ベイドンは会社の上司に引っ越しのためにあす休みを取らせてくださいと言いに行きました。その日の午後、彼は家のテーブルの上に「私がこの家を買ったので、荷造りした荷物をほどこいておいてください」というメモを残しました。子供を迎えに行ったときに家の戸に鍵をかけておきましたから、彼は鍵をかけていない窓から家の中に入って、そのメモを残したのでしょう。家主が家を売ることになったので、夫はこの家を買ったのです。デビーは42歳ですから、43年間か44年間この家に住んでいます。子供のいる家族向きの家です。増築したほうがよかったのかもしれませんが、していません。広い庭があります。

私たちには6人の孫がいますが、孫たちは庭が大好きです。

ブレンドンが小学校にあがるまで、私は働きませんでした。ブレンドンが5歳になったとき、フルタイムで働き始めました。私はミドル・ブライトン・モーターズ（自動車販売会社）で仕事に就きました。ミドル・ブライトン・モーターズで10年間か12年間働きました。事務仕事をしたり、車を運転してベントンを引き取ってきたりしました。その会社が閉鎖になったので、ケローフォーキナー（自動車販売会社）で働き始めました。ジャガー（Jaguar）とロールスロイス（Rolls-Royce）を販売する会社で、サウス・メルボルン（South Melbourne, 都心の南隣にあるサバーク）にありました。

私が働いていたとき、子供たちが学校から戻る頃に人に来てもらい、家にいてもらいました。私が仕事で家にいないとき、私の女友達の娘が家に来て、子供たちの世話をしてくれました。その女の子はこの通りを少し行ったところにある学校に行っていました。その女の子は3時半か4時に学校からこの家に来て、子供たちに夕食を食べさせたりしました。私は5時か5時15分に帰宅して、その女の子と代わりました。そして、その女の子は家に帰りました。私は朝仕事に行く前に、ベッドメイキング、芝刈り、洗濯、夕食の準備などすべてのことをしておかねばなりませんでした。

私はケローフォーキナーに7年間勤めたあと、仕事を完全にやめ、専業主婦になりました。その頃、末の子供は学校を卒業しようとしていました。子供たちが学校に行っていたとき、私はほとんどフルタイムで働いていました。ブレンドンが小学校を卒業してハイスクールに入る1年間だけ、私は仕事をしませんでした。子供たちが学校に行っているときには、教育にお金がかかりました。子供たちが学校を卒業してお金がかからなくなったので、私は仕事をやめました。

最初に家を出た子供はデビーです。彼女は3人の友人と家を借りて住みました。でも、そこでの生活が合わなくて、1年でこの家に戻ってきました。トレイシーは結婚したときに、家を出ました。ブレンドンとデビーも結婚したときに、家を出ました。ブレンドンが最後に家を出ました。15年前のことです。ブレンドンは離婚してこの家に戻ってきて、私たちと3年間一緒に住みました。ブレンドンには前の妻との間に娘がいます。彼は婚約者のメディと数年前に出会いました。

私が退職したあとも、ベイドンは毎日働いていました。彼は駐車場を経営していましたが、売り払い

ました。29年間その仕事をしました。そのあと、大蔵省（Treasury）の整備工場で自動車整備の仕事に就きました。私が自宅にいて、ベイドンが仕事をするという生活を10年か12年しました。彼は今72歳ですが、69歳のときに退職しました。退職してから、3年半がたちます。

私たちきょうだいはみんな、ボーウィン（Balwyn、メルボルンの中心から東に9キロのところにあるサバーブ）の近くに住んでいました。私たちの両親は、子供や孫たちの近く住むためにボーウィンに引っ越して来ました。両親はカトリック教会のフラットに入りました。カトリック教会がそのフラットを持っていました。道路を挟んだ教会の向こう側に、そのフラットはありました。両親はそうした暮らしを望んでいましたから、よかったです。父親はカンバーウェル（Camberwell、メルボルンの中心から東に10キロ・メートルのほどのところにあるサバーブ）に老人ホーム（ナーシングホステル）を建設するために募金運動をしました。父親はその老人ホームができる前に死んでしまいましたが、母親はその老人ホームに入りました。母親は病気が重くなったときそこを出て、ビラ・オニールに入りました。

退職後、私は両親をさまざまな会合に連れて行ったり、長期の旅行に連れて行ったり、都心に買い物に連れて行ったり、予約に合わせて医者に連れて行ったりしました。両親が毎日の生活でやることを助けてあげていました。忙しかったです。父親は19年前に死に、母親は15年前に死にました。私は両親とともに親密でした。私の妹は家族の歴史を書いていました。彼女は先日私に電話をかけてきて、「このことを教えてよ」と聞いてきました。私は父親が生きていたときよく言っていたように、「お父さんに聞いたら」と言ってしまいました。父親は19年も前に死んでいたのにです。私は両親をとっても愛しています。

ベイドンは北アイルランドにいたとき、農場で働いていました。オーストラリアの田舎を少し見たいと思い、オーストラリアに来ました。彼がメルボルンに旅立つ1週間前に、彼の兄はカナダに旅立ちました。ベイドンは19歳のときメルボルンに来ました。そして、路面電車の車掌となりました。今は路面電車に車掌はいませんが、当時は車掌がいました。次に、パース（Perth、西オーストラリア州の州都）に行き、テレコム（国営の電話会社）に勤めました。そのあと、メルボルンに戻ってきて、私と出会いました。彼がこの国に来てもう50年も経ったなんて、気がつきませんでした。ある人が夫に「あな

たはいつオーストラリアに来たのですか」と聞いたとき、夫は「（メルボルン）オリンピックのときに来ました」と答えました。その人は、「それは、50年も前のことだよ」と少し驚いて言いました。

ベイドンはプロテスタントです。でも、彼は子供たちにとっていつでもいい父親でいてくれました。私はカトリック教徒です。私たちはカトリック教会で結婚式を挙げました。北アイルランドの夫の実家に送った唯一の物は、結婚式への招待状だけでした。ガーデンバール（Gardenvale、グレンアイラ市を構成するサバーブのうちの1つ）のジェームス教会とだけ書かれた招待状でした。夫の両親は招待状を受け取ってくれました。結婚式を北アイルランドで挙げていません。夫の両親はプロテスタントで、私がカトリック教徒であることを知っていました。

息子のブレンドンが生まれたとき、夫の母親から手紙が来て、「ブレンドンと一緒に北アイルランド島に来ないでください。Brendonと名前をつづることから、プロテスタントの北アイルランド島の人たちは彼がカトリック教徒であると分かりますから」と言ってきました。私はBrendon（カトリックのつづり方）とBrendan（プロテスタントのつづり方）とのつづりの違いがあることを知りませんでした。私は夫の両親と会ったことはありませんでした。でも、電話で話したり、手紙を書いたり、プレゼントを送ったりよくしました。

夫が駐車場の経営をやめたとき、私たちは孫娘エリンを連れて北アイルランドを旅行しました。ベイドンの生まれ故郷にも行きました。その孫娘はそのとき5歳で、今20歳ですから、その旅行は15年前のことです。夫が故郷を出て以来、故郷に戻ったのはこのときだけです。

ベイドンの家族は11人でした。姉妹のうちの2人はガンで死んでいました。両親も死に、兄弟もすべて死んでいました。ベイドンの両親は娘の1人に農場を残しました。私たちはその農場へ行ってみました。誰もそこに住んでいませんでした。私たちが窓越しにのぞくと、クリスタル製の飾り棚がありました。親戚の人は火をおこして、料理を作ってくれました。私たちはそこで食事をしました。ドリーンという親戚の人は3枚の絵を持ってきて、私たちに渡しました。夫の両親は、私たちが来たら絵を私たちに渡すようにと言って、絵を残したそうです。

ベイドンは長い間会ったことのなかった従兄弟の何人かと会いたかったので、南アイルランドへ行きました。南アイルランドから北アイルランドへ戻って来て、国境で止まると、銃を持った兵士が寄ってきました。夫の義理の弟グリアがバンを運転してい

ました。兵士は運転免許証の提示を求めました。グリアは運転免許証を持ってくるのを忘れていました。北アイルランドで身分証明書を持たないでいるなんて絶対にしてはいけないことです。グリアが「私の妻は運転免許証を持っている」と言ったところ、兵士は「彼女は運転手ではない」と言いました。

エリンは両親がくれたテディーベア（縫いぐるみのクマの人形）を持っていました。兵士がテディーベアの名前を聞くと、エランは「ベルファスト」と答えました。兵士は更に「どうしてそういう名前なの」と聞くと、エリンは「私たちはそこから来たから（ベルファスト Belfast は北アイルランドの首都である）」と答えました。

兵士は「あなたたちはどこから来たのですか」と私に尋ねたので、私は「ビクトリア州のメルボルンからです」と答えました。兵士は「私にはオーストラリアに親戚がいます。彼はビクトリア州に羊の牧場を持っています。あなたは私の親戚のことを知っているでしょう」と聞いてきました。私は「北アイルランドと比べたら、オーストラリアはとても広いのですよ。ビクトリア州は北アイルランドの12倍ほどあります」と答えました。私たちはそこで争いに巻き込まれることはありませんでした。アイルランドの田舎はすばらしかったです。

南アイルランドから北アイルランドに戻ってきたとき、親戚の人は「土曜日の夜に家族再会の集いへ行きますから、どこにも出かけないでください」と言いました。土曜日の夜、その人は私たちを大きなホールへ連れて行きました。親戚の人たちがそこで盛大なパーティーを私たちのために開いてくれました。200人ほどの人がいました。夫のいとこ、その妻、その子供たちです。

私たちはたくさんのタイロン社（Tyrone）製のアイリッシュ・クリスタルと3枚の絵を持って、飛行機でメルボルンへ帰ってきました。アイリッシュ・クリスタルの1つはウォーターポンド社（Waterpond）製かもしれません。絵はこの家の洗濯室に飾ってあります。

私たちが北アイルランドを旅行したとき、長女のトレーシーは入院しました。私の母親が死んだときです。キューレット（Curette、棒状の握り手のついた鋭い縁の、環状または杓子形の器具。掻爬に用いる）で掻爬の手術を受けましたが、体が麻痺を起こしてしまいました。体の片方の感覚がなくなってしまうました。今でも、感覚がありません。夫は警察官で交替勤務でしたから、私が10ヶ月間孫のエリンの世話をしました。娘はモラブン（Moorabin、

メルボルンの中心から16キロメートルほど南東にあるサバープ）の病院から、かつてのプリンス・ヘンリー病院に移されました。その病院は、現在、セント・キルダ・ロード（St. Kilda Road、都心から南に延びる幹線道路）にあります。トレーシーは6週間か8週間そこにいました。そのあと、リハビリをしました。その間、私は娘の家に行って孫の世話をしました。

トレーシーにリーという男の子ができました。来年で9歳になります。お腹に問題があって、彼は小児科病院にずっと入院をしていました。彼は再び退院したところです。彼は生まれてからずっと病気でした。彼のお腹は、発展途上国の少年のようにかつてふくれていました。彼の腸はとても短いのです。彼は便の袋（colonoscopy bag）をおしりに4年間つけています。彼は15回も手術を受けました。彼はサウス・ヤラ路面電車に飾る写真のモデルに選ばれました。彼の写真は、今メルボルン小児病院の前を行き来する特別の路面電車に飾られています。明日、スターライト子供基金（Starlight Children's Foundation）が彼にコンピューターやプリンターなどを贈ってくれます。慈善団体が病気や障害のある子供へ誕生日にプレゼントを贈り、パーティを開いてくれるのです。

次女のデビーは夫婦でメルボルンにいたときに、子供たちを生みました。デビーがサウジ・アラビアに行ったのは、娘のマギーが1歳になったときです。夫のケ빈はサウジ・アラビアに行っていて、メルボルンにいませんでした。ですから、デビーが他の子供を生むためにメルボルンの病院にいる間、私たちがクランボーン・ノースに行って、子供たちの世話をしました。

このように、私は孫たちの生活に深く関わっています。

私はかつてサウジアラビアにいる孫たちに電話をしていました。コンピューターを習ってからは、週に1度すべての孫にEメールを出したり、彼らからEメールを受け取ったりしています。私は子供や孫からコンピューターの使い方を習いました。コンピューターのことを隅から隅まで知っているわけではありませんが、Eメールを打ったり、Eメールを受け取ったり、手紙を書いたり、ゲームをしたりできます。若い人たちはコンピューターのことをよく知っています。私は、いつかコンピューターの講習会に出てみたいと思います。

私のきょうだいのうち2人は既に死にました。末の弟が61歳で最初に死にました。一番上の姉は2年半前に74歳で死にました。私はその他の弟たち

すべてとよく連絡を取り合っています。1人はバントライザーに、1人はモワー、1人はズルーン、1人はバンズデールにいます。すべてのきょうだいはビクトリア州にいます。ズルーンにいる弟はしばしばこの家に来ます。最近では、それ以外の弟たちと会うことはなく、電話で話すだけです。弟たちとは2週間に1度ほど電話で話をします。弟のうちの1人はダンデノン（Dandenong、メルボルンの中心から30キロメートルほど南東にあるサバーク）で大きな電気店を営んでいましたので、私たちはその弟とかつては昼食を一緒によく取りました。彼は今年の71歳の誕生日に引退しました。それから、私たちは彼と頻繁に会わなくなりました。きょうだいたちと会うことはいいことですが、それぞれには自分がしないといけないことがあります。花が咲く春に、きょうだいたちは1年に1度この家に来て、バーベキューをします。

コーラックに叔父がいます。私は叔父の2番目の妻マリーと親しいです。1週間に1度は電話をしています。私の祖先はコーラックに葬られていますから、私は6ヶ月から8ヶ月に1回そこに行きます。

友人の1人であるマーガレットとは32年来の知り合いです。彼女は、サウス・オークレー（South Oakleigh、メルボルンの中心から東南東に14キロほどのところにあるサバーク）から克蘭バーンへ引っ越したところです。私たちは土曜日に彼女と一緒によく夕食を取ります。ブレンドンと彼女の息子ダックはかつて新聞配達をしていました。ブレンドンはダックの家に行きました。誰かが家の戸をノックしたので戸を開けたところ、マーガレットが立っていて、「犬がブレンドンをかんだので、モラブンの病院へ連れて行きました」と言いました。これが、マーガレットとの最初の出会いです。それ以来、マーガレットはよい友人です。

もう1人の友人イザベルとはブライトンにあるミドル・ブライトン・モーターで一緒に働いていました。私はコーラックに、彼女はコーラックの隣町に住んでいたことが分かりました。私たちは31年かそれ以上の間友人です。会って、楽しんでいます。

もう1人の友人は、この家の前の道路をもう少し下ったところに住んでいます。私の姉はその友人の家のそばに住んでいました。私は、姉を通してその人と知り合いました。そのときから、私たちはずっと友人です。私たちはいろいろなところに行きますが、お互いの家を訪問したり、私たちの子供の家に行ったりします。明日その友人の孫の誕生日ですから、私はその友人の家へ行きます。彼女の孫にとってはじめての聖餐式（Communion）が10月15日に

ありますから、私は克蘭バーン（Cranbourne、メルボルンの中心から42キロメートルほど南東にあるサバーク）の教会に行きます。

私はある友人とダンデノン丘陵（Dandenong Ranges、メルボルンの東約35キロにある標高663メートルのダンデノン山を中心とする丘陵地帯）と一緒にいきます。別の友人とは夕食を食べにレストランへしばしば行きます。友人たちとのつき合いを楽しんでいます。何か特別なことがあると、友人と会います。今週の金曜日にはチューリップ畑に友人と行きます。

今でも自分で車を運転してどこへでも行けます。夫はバンを運転し、私は普通乗用車を運転します。家には2台の車がありますから、いつでも車を使えます。私は人生を楽しんでいます。

以前、2階建ての家をこの地域で建てることは認められていませんでした。その後、この方針は緩和され、今では2階建ての家を建てることができます。この頃、若い人たちが年寄りから家を買って、近所に住むようになりました。若い人たちは家を修理するか、古い家を取り壊して、新しい家を建てます。もし私たちがこの家を売ったとしたら、次の家主は家を2階建てにして、家の後ろにある庭にも小さな家をもう1つ建てるでしょう。

③何に幸福を感じるか

私の家庭、つまり、夫、子供たち、孫たち、それと、庭いじり、外出に幸福を感じます。最近、以前よりも頻繁に外出します。土曜日に友人のマーガレットの家に行き、フットボールをテレビで見、夕食を一緒に取って、家に帰ります。土曜日に克蘭バーン・ノースにいる娘のところにも行って、よく泊まっています。

私たち夫婦は行きたいと思ったときに、映画に行きます。私たちはしたいことをしています。私たちはいつも親密で、うまくやっています。もちろん、夫は私たち家族のためにいつもそばにいてくれます。

(3) バレリーさん

バレリーさんは1929年生まれで、英国国教会（Anglican Church, Church of England）の教徒である。夫は1928年生まれである。彼女は結婚後に仕事をやめて専業主婦となったが、子供たちが大きくなってから市役所で福祉の仕事をした。現在、バレリーさんと夫はともに退職して無職である。夫婦の間に、4人の息子と1人の娘がいる。バレリーさんは夫婦で一軒家に住んでいる。ゴルフをしたり、運動のクラスに行ったり、水彩画を習ったり、友人と

つき合ったりと、社交的である。この聞き取り調査のとき、孫の男の子がいた。10歳くらいであった。両親が離婚して、父親が忙しいので、バレリーさん夫婦がそのときその孫をあずかっていた。バレリーさんは子供、孫、友人たちとの交流に生き甲斐を感じている。

バレリーさんは自分の健康状態を2と評価していたから、健康状態は比較的良好といえる。また、ロートンの活動能力指標によれば、彼女は10項目のうちの8項目を「問題なくできる」が2項目を「自分ではできない」と答えていたから、活動能力は比較的高いと判定できる。バレリーさんのパーソナル・ネットワークは、夫、2人の息子と1人の娘、3人の孫、自分の姉、2人の近隣者、4人の友人から構成されている。息子、娘、息子の妻、孫、姉といった親族はすべて「メルボルン」に住んでいる。2人の近隣者は「近隣地域」にいる。4人の友人のうち、1人は「サバブ」に、3人は「メルボルン」に住んでいる。ロートンのPGCモラルスケールの得点は13点と、幸福感は比較的高かった。

バレリーさんの年譜は、表3のようである。

表3 バレリーさんの年譜

年	(年齢)	出来事
1929年	(0歳)	近所で出生
1944年	(15歳)	学校を出て、郵政省に勤める
1950年	(21歳)	結婚
1952年	(23歳)	長子が生まれる
1968年	(39歳)	末子が生まれる
1971年	(42歳)	市役所で働き始める
1972年	(43歳)頃	通信教育で、ディプロマを取得する
1991年	(62歳)	退職する

①日常生活

月曜日、私たちは早く起きます。6時です。私は夫のボブと一緒に朝食を取りますが、ボブは糖尿病にかかっているのです。ボブと私は違ったものを食べます。そのあと、私は小さなゴルフ・クラブに行くと、9ホールをプレイします。私はゴルフにそれほど熱心ではありません。女友達や友人とつき合うことや野外にすることが好きなので、ゴルフをします。モレブン・パブリック・リンクでプレイしています。私たちは小さなグループ(social group)を作っていて、そのグループをモレブン・レディーズ・ソーシャル・ゴルフ・クラブと呼んでいます。50人がそのグループに入っています。金曜日には首都圏から離れたところにあるゴルフ・クラブでもゴルフをしています。ゴルフをしたあと、私は家に帰ります。庭や家でちょっとしたことをします。庭にい

るのが好きです。昼食を夫と一緒に取ります。私たちは夜あまり外出しません。夕食を食べ、テレビを見たり、ラジオを聞いたりします。たいてい9時半に寝ます。

火曜日、私たちは遅く起きます。7時です。朝食は月曜日と同じように取ります。ボブはゴルフの試合をしに行きます。私は水彩画のクラスに行きます。水彩画を10年間習っていますが、上達しません。イースト・ベントレー(East Bentleigh, グレンアイラ市を構成するサバブのうちの1つ)にあるモーリー・ビレッジ(Moorleigh Village, ハイスクールが閉校になったところで、地域の団体が建物を利用して活動をしている)で習っています。グレンアイラ市の画廊を借りています。たくさんの美術教室が開かれています。チューターが絵を教えてください。1クラスはたいてい10人です。私たちは絵を2時間習います。絵を描くことはいい趣味だと思いますし、いい人ばかりです。コジという日本人の女性がクラスにいます。彼女はいい絵を描きます。営利のために開かれている美術教室ではありません。20年ほど前に、美術集団が結成され、美術教室を運営しています。その集団には、ボランティアの委員会があります。私はその委員会のメンバーです。私たちはチューターを雇ったり、教室を運営したり、展覧会を年に1回開いたりします。美術館を借りて、展覧会を開きます。美術教室を運営するためのお金が足りなくなってきました。

火曜日の午後、私は買い物をついていきます。必要な食料を買ってきます。私たちは自分の食事は自分で作ります。ボブは自分の食事を自分で料理できます。彼は料理が得意です。ときどき、私たちの食事を、彼が作ったり、私が作ったりします。火曜日の夜は、家にいて、夕食を取り、テレビを見ます。見たい番組があるときもありますし、退屈な番組ばかりということもあります。ラジオも聞きます。ボブは本をたくさん読みますが、私は目が悪くなっていますから、読書が今は簡単にできません。私は新しい眼鏡を作ってもらっているところです。

ほとんどの日に、私は庭に出て、少し庭いじりをします。雑草が手に負えなくなるほど伸びてしまわないように、30分ほど草取りをします。今ボブは庭にいますが、トマト、レタス、キュウリなど新鮮な野菜をコンテナの中で育てています。

主に午後に、髪を切ってもらったり、家の掃除をしたり、庭いじりをしたり、夕食に何を食べるかを考えたりしています。地元的美容院に歩いて行きます。母親がその美容院を経営しています。彼女の娘はちょうど美容師の見習いを終えたところです。娘

は誰かの髪を切って練習をしないといけないので、私は彼女に私の髪を切らせてあげます。でも、私は「この部分はあまり切らないで」などと注文を言います。

木曜日、私は運動のクラスに行きます。筋肉を強くする運動のクラスです。ベントレーのシニア・シティズンズ・センターで開かれます。でも、老人会でなく、グレン・アイラ市がクラスを運営しています。運動のクラスは9時に始まります。私は膝の関節を人工関節に替えてもらいましたから、膝を強くしないとダメです。1時間の運動ですが、終わると疲れてしまいます。女性の先生は毎週だんだんと運動をきつくしてゆきます。10時にそこを出て、買い物をする。その後、たいてい家に帰り、ボブと一緒に昼食を取ります。ボブは木曜日たいてい家にいます。夫を亡くして一人暮らしをしている友人が、私には6人います。私はそうした友人と昼食を一緒に取るために、私はときどき外出します。ベントレーにある、イタリア人の男性が経営している小さな喫茶店（coffee shop）で、私たちは会います。私たちはそのイタリア人が好きです。彼は私たちを「べっぴんのお嬢さんたち（beautiful ladies）」と呼びます。私は疲れてしまっているのです、午後にはほとんど何もできません。木曜日の夜は家にいます。あまり出かけてゆくところはありません。私の家族はすべて働いていますから、私たちは週末に家族と会います。

私の膝の手術をした外科医は、私にプールでの運動治療（hydro-therapy）のクラスに通うように指示しました。そこで、私はプールで運動をしていました。その後、私は静脈を交換する手術を受けました。手術のあと、私は外科医から私がプールでの運動治療を再開できるほど健康になりましたという手紙を受け取りました。私はプールで運動をしたくありませんでしたから、その医者のところへ行って、「プールの中でなくて外で運動をしたい」と言いました。そこで、医者は私をその運動のクラスへ行かせました。このクラスに参加するには、体が十分健康であるという医者からの手紙が必要です。運動のクラスには、さまざまな民族の人がいます。クラスを立ち上げた女性はアフリカ出身です。イタリアやルーマニアなどいろいろな国出身の人々が生徒としてクラスにいます。私はそうした人々と交流するのを楽しんでいます。私はプールで運動をしていたときよりも、人々とずっとよく話します。私たちは冗談を言い合って、楽しい時間をすごします。

金曜日、私はゴルフをします。ゴルフのあと、ゴルフの友達と喫茶店に行きます。この友達とは月曜

日のゴルフで知り合いました。月曜日以外の日にもゴルフをしようということになって、金曜日にもゴルフをしています。4人が金曜日にゴルフをします。そのあとで、コーヒーを飲みながら、さまざまなゴシップの話題に花が咲きます。そして、家に帰ります。金曜日の午後に、掃除をしてくれる女性が来ます。私はひざをつくことができませんから、掃除を頼んでいます。私はシャワーを浴びるのもたいへんになりました。退役軍人省（Department of Veterans' Affairs）がその女性を派遣してくれます。私が手術を受けたとき、作業療法士はその女性が家に来てくれるように手配してくれました。ボブは体の調子がよくないので、掃除機で掃除することができません。ボブは体が悪いことから、退役軍人省は掃除をする女性を派遣してくれています。退役軍人省の人がときどき電話をしてきて、掃除をうまくやってもらっていますかとか、女性の掃除に満足していますかとか聞いてきます。マンディという女性にずっと来てもらっています。料金は1回の訪問で5ドルです。その女性は私がやるのが少しむずかしいようなことをしてくれます。ボブは退役軍人省のゴールド・カード（Gold Card）を持っていますから、いろいろなサービスを受けられますし、医療費が無料です。退役軍人省は排水路を掃除するような家の補修のためにも人を派遣してくれます。私たちはそうしたサービスを利用しています。私たちはそのサービスを利用しないと、自分たちでそうした作業を少しずつしないといけません。

ボブは少年水兵（boy sailor）として第2次世界大戦に従軍しました。第2次世界大戦が終わるまで6ヶ月しか勤めませんでした。彼が派遣されたところは戦争地域と少し前までは見なされていませんが、戦争地域の範囲が少し前に拡大されました。たくさんの方の退役軍人が1人また1人と死んでいったので、もう少し若い退役軍人も世話してあげようということだと、私は思います。彼は来年80歳になります。彼は糖尿病で心臓に問題があります。海軍がタバコを支給したので、ボブは水兵のときにタバコを吸い始めました。タバコは心臓に悪影響がありました。彼はタバコのために心臓発作が起り、バイパス手術を受けました。ペースメーカーを今ではつけています。退役軍人省は彼が水兵となったことから糖尿病になったということをこれまで認定しませんでした。今は認めています。そこで、彼は少し前にゴールド・カードをもらいました。私はなぜ退役軍人省が考えを変えたのか分かりません。いずれにせよ、退役軍人省が彼にゴールド・カードをくれたので、彼はいろいろなものをもらうことができます。

病院での治療はただです。

私は私的健康保険にも加入し、掛け金を払っています。私が受けた2つの手術は、それぞれ25,000ドルでした。多くの人が手術を待っていますから、もし私が私的健康保険に加入していなかったとしたら、ひざの手術を受けられなかったでしょう。私は年金（pension）や退職年金（superannuation）の給付金を銀行に預けています。私はそのお金を見ることもなく、そのお金は私的健康保険の掛け金の支払として引き落とされます。（メディケア Medicare と呼ばれる公的健康保険だけの加入者は、急を要しない手術を受けるのに長期間待たないといけない。私的健康保険にも加入していれば、手術をすぐに受けられ、手術を受ける病院や執刀医を選ぶことができる。原則的に、メディケアは手術費用の75％を負担し、私的健康保険は残りの25％を負担する。）病院にかかるのに、ボブはただで、私はお金を払わないといけません。

ボブは金曜日の午前中にゴルフをし、午後にくつろぎます。私たちは夜にあまり外出しませんが、金曜日の夜はいつも外出し、夕食を地元のレストランで取ります。一緒に食事をするグループがあります。私たちは、数組の夫婦、妻を亡くした男性、夫を亡くした2人の女性と一緒に食事をします。その男性の亡くなった妻は私の友人でした。私たちは2台の車に乗り込んで、退役軍人会（RSL）のレストランやチェルtenham（Cheltenham, メルボルンの中心から南東に18キロのところにあるサバーク）にあるレストランに行きます。金曜日の夜に、私は料理をしません。私は働いていないので、おつき合いは昼間によくします。

私には、4人の息子と1人の娘、12人の孫、1人のひ孫がいます。私たちは大家族です。みなが集まると、25人になります。私たちは週末につき合います。隣に居るのは、孫のニコラスです。両親が離婚し、父親が忙しいので、ニコラスは数日間私たちのところにいます。私たちはニコラスを映画に連れて行ってあげ、あす家に送り届けます。孫たちは週末に来ますが、みなすでに大きくなってしまいました。孫娘たちはよく来ますが、孫の男の子たちはあまり来ません。私はすべての家の電話番号や携帯電話の電話番号をひかえています。助けが必要とき、私は電話番号のリストの中から誰かを探して、来てもらいます。ボブはしばしば糖尿病で意識を失って（disabetic hypo）、救急車で病院に運ばれました。もしそうしたことが起こったときは、電話をして誰かに来て助けてもらいます。大家族であることはよいことだと思います。孫はあまり頻繁にこの家

に来ませんが、リストの中の誰かがいて、助けにしてくれます。このことでとても元気づけられます。

このあたりのすべての家は第2次世界大戦後に一斉に建てられました。もとからいた住民の多くは引っ越してしまいましたが、この並びの家々には、もとからの人々がまだ住んでいます。年を取った人たちはみな同じ時期にここに入ってきました。私は、隣に住んでいるレスと一緒に小学校へ通いました。私たちはよい友人です。ここの若い住民は素晴らしい人たちです。先日、救急車がこの家に来ました。近所の若い人はそれを見て、何か助けが必要でしたら電話をしてくださいと自宅の電話番号を書いて、ポストに入れておいてくれました。私には家族がありますから、近所の人の助けは必要ありません。でも、家族のいない人にとっては、そうした近所の人がいるのは素晴らしいことだと思います。近所の若い家族には、学校に通う子供がいます。近所の人たちはとてもいい人たちなので、ここから引っ越したくありません。

日曜日の午後に家族が来ますから、朝起きるとたいていスコーン（scone, 小さな円筒状のケーキで、お茶の時間に出される）を作ります。私たちは庭いじりをして、昼食を食べます。私は誰かが来ることを知っていますから、私は塩味のビスケットなどを作ります。孫娘たちは自動車を運転するようになりましたから、この家によく来ます。彼女たちはこの近くにある工場のアウトレット店で服の買い物をするのが好きです。そのあと、この家に来て服を見せてゆくのです。私たちは彼女たちが来るのが好きです。彼女たちはあす来るでしょう。この家に来るように言わなければ、孫の男の子たちはこの家に来ません。ニコラスと私は今日の午後映画に行きます。ニコラスはフットボールの表彰式に出ないといけないので、私たちはあすニコラスを自宅に送り届けます。

夫も私もプロビス（Probus Club, 退職者のための集団）というソーシャル・グループに入っています。専門職のビジネスに就いていた退職者の集団なので、プロビスという名前です。（ProfessionalとBusinessの最初の文字を取って、集団の名前としていることを言っている。）どんな人でもこの集団に入れます。家庭で子育てをしていた母親、タクシーの運転手、コック、家庭看護の人、保育士であった人たちでも入会する資格があります。私たちは1ヶ月に1度会合を開きます。ボランティアの委員会があって、そのメンバーの1人が講演者に講演を依頼します。講演者は私たちに1時間ほどさまざまなテーマの話をします。これまで、女性警察官に路上、

旅行中、家庭で身の安全をどのように確保するかを話してもらったり、消防士に火事に備えてどのように家を建てたらよいかを話してもらったりしました。ランの育て方を話してもらってことがあります。この講演を聞いて、私は間違ったランの育て方をしているのが分かりました。

こうした会合を開く外に、プロビスは1ヶ月に1度旅行の会を催します。旅行を計画する委員会が次の旅行の行き先や料金を掲示します。それにもとづいて、私たちは旅行に参加するかどうかを決めます。参加費は毎回30ドルくらいですから、興味のわからない旅行には参加しません。どの旅行に行きたいかやどの旅行なら参加費を払えるかといったことを考えて、参加する旅行を決めます。私たちはすべての旅行に参加するわけではありません。バスが来て、私たちを目的地まで連れて行ってくれます。

この前の旅行は、都心にあるテルストラ・ドーム（Telstra Dome）でした。今、その球技場はたんにドームと呼ばれています。その球技場に行ったあと、私たちは昼食を取りに、カジノへ行きました（the Casinos）。昼食はただでしたが、私たちはカジノをするために3時間か4時間そこにいることになっていました。私はスロット・マシン（poker machine）をあまり好きではありませんから、コーヒーを飲みながら友人と長い時間話をし、昼食を取りました。私は小さな箱を持っています。私は毎週末にスロット・マシンのあるところに行って、お金をむだ遣いしないで、その箱に1ドル硬貨をとくときに入れます。その貯めた硬貨を持って行ってカジノでスロット・マシンをしたところ、30ドルもうかりました。でも、カジノに行ってスロット・マシンをまたやろうとは思いません。1年に1度で十分です。

私が加入しているプロビスは女性の団体ですが、夫を旅行に連れて行くことができます。私はときどき夫も連れて行きます。夫は買い物がきらいですから、旅行でビクトリア・マーケット（Queen Victoria Market、メルボルンの中心にある大きな市場で、観光名所でもある）に行ったとき、私は彼に旅行に参加するかどうかを聞きませんでした。

おもしろい旅行が2つありました。ある旅行では、戦争慰霊館（Shrine of Remembrance、戦争で亡くなった兵士のための慰霊館で、都心の南にある）へ行き、ヤラ川（Yarra River、メルボルンの中心を流れる川）を船で巡り、ビクトリア・マーケットへ行き、エッセンドン・フットボール・クラブで昼食を取り、過去の選手の写真などが飾ってあるそのクラブのホール（Hall of Fame）を見学しました。戦争

慰霊館の地下にたくさんの展示の部屋があります。戦争に従軍した人や戦死した人の名前がありますから、ボブはそこに行くのが楽しみでした。私たちはバスで戦争慰霊館へ行きました。そこで、ガイドがいろいろと説明してくれました。別の旅行では、メルボルンの中心にあるトンネルとフリーウエー（高速道路）に行きました。トンネルとフリーウエーは繋がっていて、車でトンネルをくぐってメルボルンのある側から別の側へ行き、フリーウエーでずっと遠くまで行けます。何も見るものがなく、ともかく車で走るばかりです。（都心近くの地下を走るハイウエー・トンネルであるバーンリー・トンネル Burnley Tunnelは、西へ向かうウェスト・ゲート・フリーウエー West Gate Freewayと南東へ向かうモナシュ・フリーウエー Monash Freewayを結んでいる。バーンリー・トンネルは2000年に完成した。）トンネルにもぐって、別のフリーウエーに出て、メルボルンの別の側に行くのですが、私は自分たちがバスでどこに行ったのかまったく分かりませんでした。本当にビックリしました。

男性が加入するプロビスもあり、夫はそれに入っています。女性のプロビス、男性のプロビス、男性と女性のプロビスがあります。この前、新聞を読んでいたら、「チェルシー（Chelsea、メルボルンの中心から南東に29キロのところにある海に面したサバープ）のプロビスの女性たち（ladies）が旅行に行き、2人の夫もそれに参加しました」という記事が目にとまりました。30人の女性と2人の夫が旅行に行ったのだったと思います。「2人の夫」ではなく、「2人の男性ゲスト」と記事には書いてありました。これには笑ってしまいました。

②ライフ・ヒストリー

私はこのサバープで生まれました。だいたい1キロほど離れたところでは、両親は家を持っていました。当時、このあたり一帯は住宅地ではなく、酪農場や野菜の農場でした。私たちはすべて農業をしていました。私は小さな小学校に行きました。今では、100年の歴史があります。小学校は3キロ離れていました。私はきょうだいたちとそこへ歩いて通いました。楽しい子供時代をおくりました。私たちは自転車を持っていました。私たちは自転車に乗って、楽しみました。ブライトン（Brighton、メルボルンの中心から南東に10キロのところにあるサバープ）の浜辺までよく自転車に乗って行き、泳ぎました。そこまでは遠い道のりでした。私は第8学年まで小学校へ行きました。今のように第6学年でなく、第8学年までです。私は13歳と学校を出るにはあま

りに若かったので、ハンプトン（Hampton, メルボルンの中心から南南東に14キロのところにあるサバーク）のハイスクールへ行きました。自転車ですこへ通いました。10代の頃、私たちは教会の若者の団体（youth group）へ行きました。当時は、今と違ってあまりやることはありませんでした。映画会がありました。私たちが属していた教会はダンスの会を開きましたから、私たちはそれに参加しました。当時の私たちは、現在ほどたくさんの服を持っていませんでした。戦争中と戦後、私たちは配給帳（ration book）のクーポンで食料や服を買いました。母親はレースのカーテンで私のイブニングドレスを作ってくれました。

15歳でハイスクールを出ました。姉と私は電話交換手として当時の郵政省（Post Master General's Department）で働きました。私は仕事をいくつか替わりましたが、タイプの仕事を主にしました。

私はボブとハンプトン記念ホールのダンスの会で知り合いました。私はそのダンスの会にバスでよく行きました。彼は海軍からちょうど復員したときでした。私は18歳で、彼は20歳でした。彼は17歳ととても若いときに少年水兵として海軍に入りました。若くして海軍に入るのには父親の許可が必要でしたが、彼は海が好きでした。彼はよくヨットを走らせたりしていました。当時の多くの若者には軍隊の兵役につくことがどういうものか分からなかったのだと、私は思います。だから、海軍に志願したのでしょう。私たちは長い間交際し、1950年に結婚しました。彼は仕事を見つけて、仕事に就かないといけませんでした、やりたい仕事に就くのはむずかしいことでした。彼は銀行での仕事を見つけ、銀行に20年間勤めました。そこをやめてから、株式仲買人（share broker）となりました。

私たちは初めサリーヒルズ（Surrey Hills, メルボルンの中心から東に13キロのところにあるサバーク）に家を借りました。私の両親はこの家の近くに住んでいましたから、私はそこに住むのがいやでした。農民がこのあたりでまだカボチャを作っていた頃に、ボブはこの土地を買いました。ですから、ここに暮らす人はカボチャと一緒に住むようなものでした。私はここに住むのが好きでした。私たちはそれからずっとここに住んでいて、ここから家を替わったことはありません。12月で56年になります。

すべての子供たちはこの家で生まれました。5人の子供がいます。トレバーは54歳、ジュニファーは51歳、マリーは48歳、ロスは46歳、グレイグは38歳です。グレイグに娘ができました。来月、1歳になります。年長の孫は26歳で、彼女にも子供

ができました。

子供が小さいとき、私は家庭にいて、働きませんでした。当時、役所や銀行は既婚の女性を雇いませんでしたから、私は仕事を失いました。子供と一緒に家庭にいるのが好きでしたから、働きたいとは思いませんでした。

今の母親は仕事や保育所を見つけなければなりません、当時の母親は今の母親ほど生活がたいへんではありませんでした。今の母親はどうやってそうしたことをうまくやってゆくのでしょう。当時の生活はもっとゆったりとしていましたし、そんなにプレッシャーはありませんでした。私は生活を楽しんでいました。買い物にしても、当時はもっと楽でした。小さな食料雑貨店が両親の家の近くにありました。私の子供が家庭にいたとき、その主人が電話を毎週かけてきて、注文を聞いて、配達してくれました。その人が品物を配達してくれたときに、私は代金を払いました。その人は注文した物を届けてくれるとき、もし私が頼めば、肉屋で肉を買って、一緒に届けてくれました。この頃では、母親が2人や3人の子供を連れてスーパーマーケットを歩き回り、子供たちが棚にある物をつかんだりするのを見かけます。買い物がたいへんです。

商店は両親の家の近くにありました。買う物が軽いとき、私は大きい子供を三輪車に乗せ、1人の子供を乳母車の座席にすわらせ、もう1人の子供を乳母車に乗せて、歩いて買い物に行きました。私たちは車を持っていませんでしたから、三輪車、乳母車、足が私たちの交通手段でした。すべてがとても小さかったので、あまり遠くまで行かなくてもよかったのです。

年上の2人の子供が大学に入って、もっとお金が必要になってから、私は再び働き始めました。私は偶然仕事に就きました。この通りの端に住む女性の1人は、ミールズ・オン・ウィールズの監督の仕事をしていました。老人に食事を配達する仕事です。その仕事はきついので、彼女はその仕事がいやでした。彼女は私が仕事を探しているのを知っていました。ある日、私は彼女と食事の配達に出ました。彼女は私に「この仕事が好きですか」と聞きました。私が「好きです」と答えたところ、彼女は仕事をやめてしまいました。翌日食事を配達する人がいないので、市役所は私を雇わざるをえなくなりました。こうして、私はブライトン市役所（Brighton City Council）に勤めることになりました。パートタイムの仕事でした。

ミールズ・オン・ウィールズの仕事をしていたとき、本部で老人へのサービスのコーディネーターに

なるように言われ、その仕事に替わりました。その後、更に昇進して、すべての福祉部門のコーディネーターとなりました。4人が管理や運営の仕事をしていました。私はホームヘルパーの女性、コミュニティ・バスの運転手、家の維持・管理員（home maintenance men）を監督していました。そして、ホームヘルパーの派遣（home help services）、家族介護者が休みを取るための代理介護者の一時派遣（respite services）、老人を買い物やデイ・センターなどへ連れて行くコミュニティ・バスの運行、家の維持・管理員の派遣といったことをしていました。家庭の老人を助ける40人のホームヘルパーの女性がいましたが、彼女たちはまじめでよく働いてくれ、何ら問題も起こりませんでした。仕事はとても楽しかったです。一番年下のクレイグはハイスクールに行っていました。クレイグが帰宅して少しの間一人で家にいることができるほど大きくなったとき、私はパートタイムからフルタイムの勤務に替わりました。

私はギプスランド・カレッジ・オブ・エジュケーション（Gippsland College of Education）で福祉サービスを通信教育（external study）で勉強しました。フルタイムの学生が学期の休みに入ったとき、私たちは学校へ行き、2週間そこで勉強しました。チューターが教えてくれました。一部は通信教育で、一部は通学して、勉強しました。そして、ディプロマ（diploma、高等教育の修了証書で、学士号よりもレベルが低く、専門的で職業とより結びついた性格のもの）を取りました。私が40歳の頃です。私はコーディネーターに昇進し、別のところで働くことになりました。その上司は私が勉強のために学校に行くことを許してくれなかったので、コースを修了することができませんでした。私が学校に行ったら、私の仕事をする人が他にいなかったの、その上司は通学を許可してくれませんでした。心が狭かったから、彼が許可しなかったというわけではありません。

私は62歳までその仕事をしていました。やめたのは、15年前です。20年間働きました。ボブは心臓の病気になり、バイパス手術をすることになりました。これは大手術でした。そこで、私は仕事をやめ、彼と一緒に家にいることにしました。

私はブライトン市役所に勤めていましたが、合併のために、ブライトン市はもうありません。3つの市が合併して、ベイ・サイド市になりました。市域がとても広くなりました。合併前に、私は退職しました。もし働き続けていたら、合併のときに、私は解雇されていたかもしれません。今では、スタッフ

の数がはるかに少なくなっています。私は市役所で働いている人と会ったことはありませんから、市役所が福祉サービスを今どのように運営しているのかわかりません。私はずっと前にやめてしまいましたから、何も言えません。私はその時にやめてよかったと思います。

私たちはインバーロック（Inverloch、メルボルンの中心から南東へ143キロにある、海に面したビクトリア州の村。人口約4000人）に小さな別荘を持っていました。別荘は私の学校に近かったので、私が学校で勉強するとき、そこに行き泊まりました。子供たちはそこに泊まってサーフィンをするのが好きでした。すべての子供たちはもう巣立って家にいませんから、私たちは今その別荘を持っていません。子供たちは今では車を運転してサーフィンに行きますから、サーフィンをするために別荘に泊まる必要はありません。別荘の維持が負担となったので、私たちは別荘を売ってしまいました。

私は子育てを楽しみました。子育てと仕事を両立させていたので忙しかったのですが、夫がとても助けてくれました。私が働き始めたとき、年上の2人の子供は大学生で、他の子供たちはまだハイスクールや小学校へ行っていました。私はパートタイムで働いていましたから、子供が学校から帰って来るとき、私は家に戻っていました。ですから、私は保育園を探したりすることはありませんでした。私の母親が生きていて、近くにすんでいましたから、子供たちが病気のとき、母親が子供たちの世話をしてくれました。保育園を探したりすることはありませんでしたから、子育てと仕事の両立はそれほどむずかしくありませんでした。

休みの期間になると、私たちは別荘によく行きました。夫が子供たちとそこに泊まって、私はこの家にいて仕事に行きました。そのあと、私が別荘に行き、夫は家に戻って、仕事に行きました。交替で子供たちのめんどうを見ながら、私たちはうまくやりくりをしました。私は皿洗いをほとんどしたことがありません。夫が子供たちと皿洗いをやってくれました。夫は子育てや家事をやってくれました。子供たちもそうでした。大きな子供たちは小さな子供たちを助けてあげていました。幸せな時代でした。すべての家族が家庭にいて、社会がゆったりとしていたので、多くの問題に直面することはありませんでした。麻薬の恐怖のような、現在、問題となっているようなこともありませんでした。

年上の2人の子供は勉強に熱心で、大学で学位をとりました。娘はモナシュ大学の医学部で働いています。彼女は病院学（hospital science）を専攻して

いますが、私は彼女が何を研究しているのか知りません。モナシュ大学はマレーシアにキャンパスがありますが、彼女はマレーシアに行って教えることになっています。彼女はイタリアでの会議に出席して、ちょうどオーストラリアに帰ってきたところです。2人の息子は見習いをして、建築業者になりました。一番年下の子供はコンピューターの情報工学を勉強しました。すべての子供はそれぞれの分野でよくやりました。建築業者となった1人の子供は、今は先生となり、テイフ（TAFE、専門学校）で建築を教えています。建築業者となったもう1人の子供は消防隊に加わり、現在2つの仕事をしています。消防士の仕事と、ベランダや裏庭のテラスといった小さなものを作る仕事です。私は、子供たちがよくやったと思います。

退職後、孫たちが小さかったとき、私は孫たちの世話をしてあげました。子供夫婦が仕事で忙しく、孫の世話をしてほしいとき、私は世話をしました。いつも孫の世話をしていたというわけではありません。私は子供の世話をすることが好きです。子供がまわりにいるのが好きです。若返ります。すべての子供たちはメルボルンに住んでいます。子供たちはフランクストン（Frankston、メルボルンの中心から南東に40キロのところにある海に面したサバーク）からリリデール（Lilydale、メルボルンの中心から東南東に36キロのところにあるサバーク）の間に住んでいます。私たちの家は子供たちの家のちょうど真ん中にあります。この前リリデールの息子に女の子ができましたが、リリデールはとても遠いので、私はその孫を世話しません。息子の妻の母親にとってその孫はたった一人の孫ですから、息子の妻の母親が喜んでその孫を世話しています。

③何に幸福を感じるか

なによりもまず、夫、子供、孫といった私の家族との交流です。それと、友人たちとの交流です。私にはこれまでに作ってきたたくさんの友人がいます。私は友人たちとつき合うのが好きです。

友人の何人かとは仕事で50年前に知り合いました。私たちは連絡を取り合いながら、1年に1度会っています。子供が行っていた小学校の母親会（mothers' club）で知り合った人とも、40年以上にもわたってつき合っています。人生の後になって、私が美術教室、プロビス、ゴルフ・グループに加入

したことで知り合った友人もいます。私の友人がゲスト・デイにこうした集団に来るように誘ってくれて、私は集団に入りました。ゲスト・デイというのはオープン・デイでのことです。その日に、会員は友人をゲストとして連れて行くことができます。私はこうしてゴルフ・クラブに入りました。美術教室もそうです。私は何人かの友人に私が行っている運動のクラスの話を話したら、友人はそれに入りました。私がかつて一緒に働いていた女性はゴルフ・グループの友人です。このように、集団に加入することと友人となることは繋がっているようです。外出すれば、友人を作るのは簡単です。家にずっといれば、友人をつくることはできません。自ら率先してやってゆくことです。私は人々と一緒にいるのが好きです。家の中に一人ですわっているのはいやです。夫は、私が誰とでも話せると言います。私はバスや電車に乗ると、必ず誰かと話します。でも、いつも私から話し始めるというわけではありません。人々は話し好きです。

私は外出してゴルフをすることから、とくに満足を得ています。歩く運動を毎日することはよいことですが、ゴルフをすることで歩く運動ができます。私たちはゴルフがうまくありません。私は打ったボールを眼で追いかけることができず、まったく別の方向を見ていたりします。ボールを打っても、別の方角へ飛んでいたりします。おもしろいので、たくさん笑いが起こります。私たちはゴルフを楽しんでいます。美術教室でも、真剣にはやっていません。先生は私たちよりも真剣です。学期の最後の授業の日に、私たちは食べ物や飲み物を持ちよってパーティを開きました。楽しいです。私は人々とのつき合い（social life）が最も重要なことだと思っています。

私は公共医療サービス（Health Services）をととても大切だと思います。私が行っているお医者さんです。私が病気になったとき、お医者さんは病気を治してくれます。ですから、私は公共医療サービスをとても大切だと思います。私は道を下ったところの一般開業医を信頼しています。もっと専門の診察が必要なとき、その開業医は専門医を患者に紹介してくれます。彼は専門医を私に紹介してくれ、私は2つの大手術を受けました。私は、手術によってまたよくなりました。